

時間の前置詞InとOnについて

著者	本多 啓
雑誌名	神戸外大論叢
巻	74
ページ	45-78
発行年	2021-11-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002424/

時間の前置詞 In と On について*

本多 啓

1 はじめに

本稿は、時間を表す前置詞 in と on の使い分けを取り上げ、認知意味論の立場から検討する。

本題に入る前に、まず認知意味論の最も基本的な意味観について簡略に述べておく¹。

認知意味論とは、言葉の意味 (の記述) を、指示対象 (の記述) と同一視するのではなく、対象に対する話者・概念化者の捉え方に基づいて考える立場である。「捉え方 (construal)」とは Langacker (2019) の次の規定に示されるような概念である。

- (1) *Construal* is our ability to conceive and portray the same situation in alternate ways.

Construal とは、同一の状況を異なるし方で認識し²、描写する人間の能力のことである。

(Langacker (2019: 140); イタリックは原文、訳は本多³。)

分かりやすい事例として (2) がある。Coventry (2019) は、この 2 文が同一

* 有益なコメントをくださった萩澤大輝氏とお二人の査読者に感謝いたします。本稿の内容についての責任は本多にあります。本稿の内容は神戸市外国語大学における授業「意味論講義」の内容の一部を改訂増補したものです。学部授業に基づくものであるため、本稿は認知意味論に関して入門レベルの読者も想定に入れて執筆しています。

¹ 本節の内容は一部本多 (2021) と共通である。

² 「認識する」を認知主義の度合いを薄めた言い方で言うと、「分節・カテゴリー化し、注意を向ける」となる。なお、本稿で言う「認知主義」とは概念主義と現実構成主義のことであるが、説明は本稿では割愛する。詳細は別稿 (本多 (2021)) に譲る。あるいは井上 (2018) などを参照されたい。本稿で言う「認知主義」は必ずしも「いわゆる「客観主義」と対置される、認知言語学の言語観・意味観に基づく考え方」(たとえば西村・野矢 (2013) などの用語法) を意味しない。ただ、Langacker 自身は本稿で言う「認知主義」者である。

³ 以下、特に断りのない限り強調と訳は本多による。

の状況を指し示すことができると指摘している。

- (2) a. The coffee capsule is **in** the dish.

(コーヒーカプセルが皿に入っている。)

- b. The coffee capsule is **on** the plate.

(コーヒーカプセルが皿に乗っている。)

言語事実としては、同一の事物を dish と呼ぶことと plate と呼ぶことの両方が可能な場合があり、そして、その呼び方の違いによって前置詞の選択に影響が出る、ということである。

ここで、dish と plate が異なる意味の名詞であることは言うまでもない。また、前置詞 in と on の意味が異なることも同様に明らかであり、前置詞句 in the dish と on the plate も議論の余地なく異なる意味を持つ。つまり、同一の状況を指し示すのに異なる意味の言語表現が用いられうるということである。

これに対する解釈ないし説明としては、同一の状況であっても、異なる捉え方がされれば、その状況を指示するのに異なる意味の言語表現を用いることができるということだと考えることができる。具体的には、当該の事物に関して「物を入れることができる」という属性ないし側面⁴に注目した場合には、その物は「入れるもの (dish)」としてカテゴリー化され、前置詞としては容器に用いられる in が使われるが、同じ物に関して「物を乗せることができる」という属性ないし側面に注目した場合には、その物は「乗せるもの (plate)」としてカテゴリー化され、前置詞としては面に用いられる on が使われる、ということである (本多 (2019))⁵。

これは筆者が認知意味論の基本的な考え方としてしばしば言及する次の (3) の b. に該当する例である。

- (3) a. 異なる対象に同じ捉え方を適用して捉えることが、異なる対象に同じ言語表現を適用することが可能になる仕組みの一つである。

- b. 同じ対象に異なる捉え方を適用して捉えることが、同じ対象に異

⁴ 生態心理学 (Gibson (1979), 佐々木 (2015), 河野 (2003), 本多 (2019)) の用語でいえば、「アフォーダンス (affordance)」。

⁵ この場合の in と on の選択にアフォーダンス知覚が関わっているという主張は、「英語の前置詞の意味の記述において、トラジェクターとランドマークの関係はトポロジカルな概念だけで記述しきれものではない」という観察 (Coventry and Garrod (2004), Langacker (2009)) を補強するものである。

なる言語表現を適用することが可能になる仕組みの一つである。

(本多 (2016: 96))

このように認知意味論は、事物そのものだけではなく、そのものについての人間の捉え方を重視する⁶。それによって、同じ事物について異なる言語表現が用いられる場合にその表現の意味を適切に記述することができ、またそのような表現が用いられる理由ないし動機づけを明らかにすることができる。

本稿ではこのような意味観に基づいて、前置詞 in と on の時間を表す用法を検討する。本稿は特に、morning、afternoon、evening が目的語になる場合を中心に取り上げる。

2 前置詞 in と on の時間を表す用法に関する言語事実: 辞書の記述を核に

本節では、語法記述が詳しいいくつかの学習用英和辞典にしたがって、morning、afternoon、evening が in と on に関してどのような振舞いをするかを示す。使用した辞書は『ウィズダム英和辞典』（2019 年第 4 版）、『ジーニアス英和辞典』（2014 年第 5 版）、『オーレックス英和辞典』（2013 年第 2 版）である。いずれも物書堂製の iPad 用辞書アプリに収録されたものによる。

これらの辞書の記述を総合すると、morning、afternoon、evening を目的語とする in と on は次のような分布を示す。

- (4) **in the morning / afternoon / evening**
- (5) early / late **in the morning / afternoon / evening**
- (6) **in the** early / late **morning / afternoon / evening**
- (7) a. **on the morning** of the wedding / my departure / June 1st
 b. **on / (まれ) in the morning** of June 1
 c. **on the afternoon** of April 7
 d. **on the evening** of Friday / July 3
- (8) a. **on** Sunday morning / afternoon
 b. **on / (まれ) in** Friday evening

⁶ 事物についての捉え方を重視するにあたって認知意味論は、身体活動に基盤を置く概念化者のその事物との能動的な関わりや、その事物と概念化者自身を含む環境との概念化者のやはり身体活動に基盤を置く能動的な関わり、そして概念化者自身と他者との関わりを重視する（身体性、問主観性）。ただし、その点は本稿の議論には直接は関わらない。

- (9) a. **on** a sunny morning
 b. **on** a summer afternoon
- (10) **in** / **on** an afternoon (この場合 in の方が普通)
- (11) a. **in** the early morning of July 5
 b. early on / **in** the morning of April 14 (on がふつう。)
- (12) a. at two (o'clock) **in** the morning
 b. at 8 in the morning of September 1
 (時刻を明示するときは in を用いるのがふつう。)
- (13) a. **in** the mornings
 b. **on** Saturday mornings
 c. **on** cold mornings

以下、各例文について、必要に応じて関連文献も参照しながら、記述レベルで簡単にコメントしていく。

(4) の **in** the morning などに基づき、morning/afternoon/evening を目的語とする前置詞のデフォルトは in であるとされる。(5) の early/late **in** the morning⁷ のように副詞 early / late が付いた場合、そして (6) の **in** the early/late morning のように形容詞 early / late が付いた場合も同様である。

しかし、(7) の **on** the morning of the wedding などのように「日」を特定する of 句が付くと、好まれる前置詞は on になる。(7b) の **on** / in the morning of June 1 に関して『ウィズダム英和辞典』は on の「語法」欄で in も併記しているが、in については「まれ」と注記している⁸。これは、(8) の **on** Sunday morning のように「日」を特定する表現が morning の前に現れても同じであ

⁷ 以下、特に支障のない限り morning だけに言及する。

⁸ ちなみに Fillmore (2002: 33) は次のような容認性判断を提示している。

- (i) a. He was here **on** / ***in** Christmas morning.
 b. He was here **on** / ?**in** the morning of Christmas day.
 c. He was here **in** / ***on** the morning on Christmas day.

(7b) に当たるのは (i b) であるが、Fillmore はここで in を「*」ではなく「?」としているわけである。

なお、(i c) は本稿の提案にとって問題となるが、これについては第 9 節で議論する。

る。(8b) の **on** / in Friday evening に関して、in に「まれ」と注記しているのも『ウィズダム英和辞典』の on の「語法」欄である。

これに関しては、「一般に「午前〔午後、晩、夜〕に」は in the morning [afternoon, evening, night] というが、特定の日のそれをさす場合は on を用いる方が普通」(同じく『ウィズダム英和辞典』on「語法」欄)とされるのが普通である。しかし(12b)の at 8 **in** the morning of September 1 は、これでは説明できない。これに関して『オーレックス英和辞典』は、morning の項で「特定の日の「午前中に」は前置詞は on を用いる。ただし時刻を明示するときは in を用いるのがふつう」としている。

(9) の **on** a sunny morning のように形容詞を伴い、全体に不定冠詞が付く場合には on になる。ただし(10)の **in** / on an afternoon のように形容詞を伴わず、不定冠詞のみが現れる場合には in の方が普通とのことである(『ウィズダム英和辞典』on「語法」欄による)⁹。

(11a) の **in** the early morning of July 5 は、『オーレックス英和辞典』の on の「語法」欄にある例である。同欄はこれと併記する形で early **on** the morning of July 5 を示している。(11b) の early **on** / **in** the morning of April 14 に関して on と in を併記しつつ、「on がふつう」とするのは、『ジーニアス英和辞典』の morning の項である。

ここで、安藤(2005: 640)の記述を紹介しておく。安藤は「特定の朝であっても、時刻表現や early、middle、late と共起するときは in が用いられる」として、次の例を挙げている。

- (14) a. **in** the early morning of May 10 (5月10日の早朝に)
 b. It was seven **in** the evening of a lovely summer's day.
 (それは、快い夏の日の午前〔ママ—本多注〕7時のことだった)
 (強調、訳ともに原文。)

筆者自身による簡易コーパス検索¹⁰の結果でも、in the early morning of NP の場合は in が圧倒的に優勢であった。

(11b) early **on** / **in** the morning of April 14 に関して、柏野(2011: 57)

⁹ ちなみに、in an afternoon という語列には、「午後に」の意味のものの他に「午後いっぱい／午後いっぱい」という所要時間を表す意味のものがある。本稿で議論の対象にしているのは言うまでもなく前者である。

¹⁰ 2021年4月27日実施。COCA、NOW、BNC。

は、ある母語話者の「on も可能だが in のほうがいい」というコメントを紹介しつつ、次の例を出している。

- (15) a. Early **in** the evening of June 24, Anna Perino married Loren van Ludwige.

(6月24日の夕方にアナ・ペリノはローレン・バン・ラドウィグと結婚した)

- b. Early **on** the morning of June 24, when most people were still in bed, a terrible earthquake occurred.

(6月24日の朝早く、ほとんどの人がまだ寝ているときに大地震が起きた) (強調本多、訳は原文。)

これに関しては、筆者自身が行った簡単なコーパス検索によれば、「in と on と両方とも用いられるが、on の方がやや優勢」という結果であった¹¹。

また、繰り返しになるが、(12) の at two (o'clock) **in** the morning / at 8 **in** the morning of September 1 に関して『オーレックス英和辞典』の morning の項は、時刻を明示するときは in を用いるのが普通としている。ただ、(12b) at 8 **in** the morning of September 1 に関しては、文献によって記述に揺れがある。先に紹介したように安藤 (2005: 640) はここでは in が用いられるとするが、織田 (2002: 98) は次の容認度判断を示している。

- (16) a. *two o'clock **in** the morning of ...

- b. I was sent for at eight o'clock **on** the morning of Friday the 17th. — *The Murder of Roger Ackroyd*

少し遡ると、小西 (1976: 230-231) は次の (17) のように述べ、つづけて in と on と両方の例を挙げている ((18))。

- (17) Bøgholm (p.111) は at five *in* the morning of 5th October (10月5日の朝5時に) において in を on によって置き換えることはできない、もし使うならば、on the morning, etc. を句読点でもって挿入句にしなければならない、と述べている。しかし、1920年代にはともかく、現在ではこの場合でも句読点の有無に関係なく on を用いる方が普通のようなのである。 (強調原文。)

¹¹ 2021年4月27日実施。NOW、COCA、The TV Corpus、The Movie Corpus、Corpus of American Soap Operas、TIME Magazine Corpus、BNC。

- (18) a. At 7:30 **in** the morning of April 19, 1968 — the day of Martin Luther King's funeral — Bus No. 42 was just completing regular run from the heart of San Francisco to Hunters Point ...
- b. Anibal Hernandez had been found dead at two o'clock **on** the morning of December 18th.
- c. At twelve-fifteen **on** Friday morning she telephoned to ask for an urgent visit.

また福村 (1981: 516) は「at three in the following afternoon でもよいと思いますが、on のほうが自然な表現でしょう」と述べている。

これに関しては、筆者自身によるコーパス検索では、「in と on と両方とも用いられるが、on の方が優勢」という結果であった¹²。したがって小西 (1976) の記述が実態を反映していると判断できる。

(13) の **in** the mornings / **on** Saturday mornings / **on** cold mornings のように複数形になる場合は、単数の場合と同様の振舞いとなる。

本稿は、以上の記述をもとに、以下の議論を進める¹³。

ここまでで見たように、時間を表す in と on の分布はいささか複雑な様相を示している。この使い分けがどのような仕組みによっているのかを検討するのが、本稿の課題である。

同じ morning でも in が付く場合と on が現れる場合とがあるということは、前置詞の選択が morning の時間的な長さ（だけ）によっているのではないことを意味する。また (11b) early **on** / **in** the morning of April 14 や (12b) at 8 **on** / **in** the morning of September 1 のような例は、「特定の日であれば前置詞は on」という観察にも限界があることを示している。

本稿では以下、「特定の日であれば前置詞は on」という観察を取り込みつつも、より認知意味論的なアプローチ、すなわち時間についての人間の捉え方を考慮したアプローチを探っていく。

¹² 2021 年 4 月 24 日実施。NOW、COCA、The TV Corpus、The Movie Corpus、Corpus of American Soap Operas、TIME Magazine Corpus、BNC。

¹³ ここで紹介した辞書記述とは（一部）異なる解説として、たとえばすでに言及した福村 (1981) の他に、安藤 (1981) などがある。

3 一日、朝などについての2つの捉え方

本節では、一日、朝などについて異なる2つの捉え方¹⁴の可能性があることを示す。

第一は図1に示される捉え方である。この図は、一日、朝などについて英語の話者が持っている想定される知識構造の一部を示したものである。この場合の捉え方は次の性質を持つ。

- (19) 捉え方 1: 一日、朝などについての、一日の内部構成に関心に向ける捉え方
- a. 一日の内部構成に関心に向ける。一日の外には関心に向けない。
 - b. morning / afternoon / evening をそれぞれ幅ないし長さのある時間帯として捉えており、その中での時間の経過を意識している。

原則活動しない (night ₂ /morning)	活動にふさわしい day ₂ morning afternoon evening			原則活動しない night ₂
(night ₁) 暗い	day ₁ 明るい		night ₁ 暗い	
morning ₀		(afternoon) day ₃ 24 時間		

図1 捉え方 1: 一日、朝などについての、一日の内部構成に関心に向ける捉え方

なお、注記しておく、図1はそれ自体、一日についての複数の捉え方をひとつの図にまとめたものであり、そのため実態以上に複雑になっている。人が朝などについて一日の内部構成に関心に向ける捉え方で捉えるときに、この複雑な図で示された知識構造の全体が一様に活性化するわけではないと考えられる¹⁵。

¹⁴ あるいは、認知主義の度合いを薄めた言い方で言うと、「一日、朝などに対する分節の仕方やおよび注意の向け方」ないしは「一日、朝などに注意を向ける際に注意の向け方を制約する枠組み」。

¹⁵ あるいは、認知主義の度合いを薄めた言い方で言うと、「この図の表す枠組みがカバーする時間の範囲の全体に対して一様に、この図で示したレベルの強さと解像度で注意が向けられるわけではないと考えられる」。

ここに示した内部構成は暫定的なものであり、改訂の余地がある可能性がある。詳細な議論はここでは割愛する。以下、本稿の問題設定からすれば脱線になるが、何点か考慮すべき点を示しておく。

- (20) a. day₁、day₂、day₃ を設定する根拠としては、たとえば *OALD* s.v. **day**¹⁶などを参照されたい。
- b. morning₀ は零時から正午までを指す。2 o'clock in the morning などの表現 (Wierzbicka (1993: 451 n.3)) の存在を考慮してここに入れてある。
- c. night₁ を night₂ と別に設定しているのは、night₁ and day₁ のような evening との対比を念頭に置かない場合を想定しているためである。

第二は図 2 に示される捉え方である。この図も図 1 と同じく、一日、朝などについて英語の話者が持っているものと想定される知識構造の一部を示したものである。こちらは次の性質を持つ。

- (21) 捉え方 2: 一日、朝などについての、複数の日を念頭に置いた捉え方
- a. 複数の日を念頭に置く。一日の内部構成には積極的な関心を向けない。
- b. morning / afternoon / evening のそれぞれの幅ないし長さには注目しない。

day ₃				day ₃				day ₃				day ₃			
m	a	e	n	m	a	e	n	m	a	e	n	m	a	e	n

図 2 捉え方 2: 一日、朝などについての、複数の日を念頭に置いた捉え方

このように、一日、朝などについては、異なる 2 つの捉え方の可能性がある。

4 in と on の使い分けの原理: 仮説の提示とその検証

本稿は、前節で述べた一日、朝などについての 2 つの捉え方が前置詞 in と on の使い分けの基盤にあるという仮説を立てる。すなわち、morning などに

¹⁶ <https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/day> .

関して、一日の内部構成に関心に向ける捉え方（捉え方 1）をしている場合には in が選ばれ、複数の日を念頭に置いた捉え方（捉え方 2）をしている場合には on が選ばれる、という仮説である。2 つの捉え方が競合する場合には、どちらか一方が優勢であればそちらに基づいて前置詞が選ばれ、拮抗する場合には揺れが生じることを予測する。

以下、第 2 節の例によってこの仮説を検証していく。

(4) の **in** the morning は一日の内部構成に関心に向ける捉え方 1 に基づいているといえる。ここに現れている定冠詞付きの the morning は、「複数の mornings が想定されている中でのある特定の morning」を指すものではない。つまり、この the は「他の morning ではなくてこの morning」ということを表すものではない。言い替えると、複数の日を念頭に置いた the ではない。この the は「afternoon（など）ではなくて、morning」ということを表すものである¹⁷。すなわち the morning は、一日の内部構成に関心に向け、一日の構成要素として morning、afternoon などがあるという捉え方のもとで、morning を取り出しているわけである。したがって、この場合の the morning は捉え方 1 に基づいていることになる。このことから、本稿の予測としては前置詞は in が選ばれることになる。この予測は言語事実と一致している。

(5) の early / late **in** the morning と (6) の **in** the early / late morning は、形容詞・副詞の early / late が付いている。これは、morning の内部構成にまで立ち入った見方をしているということである。したがってここでの捉え方は捉え方 1 ということになる。このことから、本稿の予測としては前置詞は in が選ばれることになる。この予測は言語事実と一致している。

なお、この場合の the early morning における the は、「late morning（や afternoon（など））ではなくて early morning」を表すものである。つまりこの the は「他の early morning ではなくてこの early morning」ということを表すものではない。

(7) の **on** the morning of the wedding には、「日」を特定する of 句が現れている。この定冠詞付きの the morning of the wedding は、他の日の mornings を排除して、結婚式の日 morning を特定して注目しているものである。つまりこの名詞句は「複数の mornings が想定されている中でのある特定の morning」を指すものであり、この the は「他の morning ではなくてこの

¹⁷ 定冠詞 the のこの用法については第 5 節でも議論する。

morning」ということを表すものである。したがってこの the morning of the wedding は、複数の日を念頭に置く捉え方 2 で朝ないし午前中を捉えた表現ということになる。このことから本稿の予測としては前置詞は on が選ばれることになる。この予測は基本的に言語事実と一致している¹⁸。(8) の on Sunday morning のように、「日」を特定する表現が morning の前に現れる場合も同様の議論が成立する。

なお、in the morning (4) の the、early / late in the morning (5) の the、そして in the early / late morning (6) の the はすべて同じ用法で、on the morning of the wedding の the morning (7) の the はこれらとは異なる用法である。

(9) の on a sunny morning は形容詞と不定冠詞を伴う例である。不定冠詞は、「複数の個物の存在が想定される状況で、その中の 1 つを、「これ」と相手に見える形で特定することはせずに指す」という働きを持つ。すなわち a sunny morning においては複数の (sunny) mornings が想定されているわけである。したがってここでの捉え方は複数の日を念頭に置いた捉え方 (捉え方 2) ということになり、本稿の予測としては前置詞は on となる。この予測は言語事実に合致している。

なお、ここで想定されている複数の個物が sunny mornings なのか、mornings なのか、両方ありうるのかについては、検証の余地がある。最初から sunny mornings だけを念頭に置き、sunny でない mornings のことは無視している場合には、想定されている個物群は sunny mornings ということになる¹⁹。一方、sunny かどうかに関係なく複数の mornings の中から取り出したある一つの morning について、それが sunny であったという場合には、想定されている個物群は mornings になる²⁰。ただ、いずれにしても複数の日を念頭に置いた捉え方 (捉え方 2) がされていることに変わりはないので、選ばれる前置詞

¹⁸ ここでは「基本的に」としているのは、『ウィズダム英和辞典』が「まれ」としながらも in を載せていること、そして注 8 で言及したように Fillmore (2002: 33) が (i a) の in を「*」ではなく「?」としていることによる。

- (i) a. He was here **on** / ?**in** the morning of Christmas day.
- b. He was here **in** / ***on** the morning on Christmas day.

ただしこの例については第 9 節でもう一度触れる。

また、繰り返しになるが、(i b) についても第 9 節で議論する。

¹⁹ この場合の sunny は制限的である。

²⁰ この場合の sunny は非制限的である。

が on になるという本稿の予測に変わりはない。

(10) の **in** / on an afternoon は本稿の提案に対する反例になる。不定冠詞が現れているということは複数の日を念頭に置いているということであり、本稿の予測では前置詞は on が選ばれることになる。しかし実際には上記のように、『ウィズダム英和辞典』on「語法」欄によれば、このように形容詞を伴わず、不定冠詞のみが現れる場合には in の方が普通とのことである。したがって、これは反例となる²¹。

これについては、**in the morning** に形を合わせようという力が働いている可能性が想定される、と述べるにとどめたい。

(11) の **in the early morning of July 5** と **early on / in the morning of April 14** は、2つの捉え方が競合する例である。early が付いているということは一日の内部構成に関心が向けられている（捉え方1が働いている）ということであるが、of 句で「日」が指定されているということは複数の日を念頭に置いている（捉え方2が働いている）ということでもある。したがって本稿の予測としてはこの場合、in と on が競合することになる。任意にあるいは恣意的にどちらか一方が好まれてもよく、両方可能でもよい、という緩い予測である。言語事実はこの予測の範囲に収まっている。

(12b) の **at 8 on / in the morning of September 1** も同様に、2つの捉え方が競合する例である。したがって本稿の予測としてはこの場合、in と on が競合することになる。任意にあるいは恣意的にどちらか一方が好まれてもよく、両方可能でもよい、という緩い予測である。言語事実はこの予測の範囲に収まっている。

(12a) の **at two (o'clock) in the morning** に関しては、これが捉え方1によること、したがって前置詞としては in が選ばれることに、問題はない。

(13) の **in the mornings / on Saturday mornings / on cold mornings** のような複数形が現れる場合については、暫定的に、捉え方のあり方とは別に単数形の場合の振舞いを継承していると考えておくことにする。the mornings のように複数形が用いられるということは、複数の日を念頭に置いた捉え方がされているということである。したがって本稿の提案は、複数形が現れる場合は一様に on が選ばれることを予測する。しかし実際には **in the mornings** のように in が現れることもあるわけである。これについて本稿では暫定的に、

²¹ ただし、注9でも言及したように、所要時間の in an afternoon とは区別されることが前提である。

複数形の **in** the mornings は単数形の **in** the morning の前置詞選択を継承していると考えことにする、ということである²²。

以上から、本稿の枠組みは第2節に提示したデータを、(10) の **in** / on an afternoon および複数形の事例という例外はあるものの、おおむね適切に捉えることができるということが出来る²³。

5 定冠詞について

上述のように、in the morning (4) の the、early / late in the morning (5) の the、そして in the early / late morning (6) の the はすべて同じ用法で、on the morning of the wedding (7) の the morning の the はこれらとは異なる用法である。

これについては、本稿は久野・高見 (2004)、柏野 (2010) の議論を踏襲している。

久野・高見 (2004: 18-24) は、「同類集合での限定化」「異種集合での限定化」という用語で2つの用法の違いを捉えている。この区別について、まずは本稿とは独立の例で考える。

- (22) a. *The summer of last year* was very hot. (同類集合での限定化)
 b. In *the summer* I take a vacation and go to Hawaii.
 (異種集合での限定化)
 (久野・高見 (2004: 18); 強調原文)

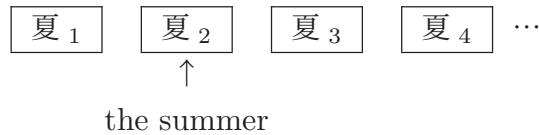
²² 本件について査読者より、in が選ばれるのは「あることが習慣的に毎朝起こっているような場合、複数の日が念頭にあるものの、強く意識されているのは1日の中の「朝」という時間帯なので、1日の内部に関心がある」(下線原文) ためではないかとの提案があった。つまり「慣習的な用法としての in the morning の in を踏襲したというよりも、捉え方から自然と in が選択された例と考える」という提案である。この提案は本稿の主張にとって都合の良いものではあるが、最終的な判断は保留としたい。

²³ 安藤 (1981) が挙げている次の例も本稿の提案にとって問題になる。

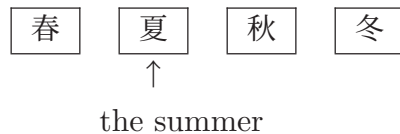
- (i) a. about 5.25 *on the evening* in April (Coward)
 b. It was hot *in the late May afternoon*. (Hemingway) (強調安藤。)

ただしこれらはいずれも文学作品から取られた例であり、検討に当たっては文脈を慎重に考慮しなければならない。(i b) は *For Whom the Bell Tolls* から採られた文であるが、これは移動中の登場人物が額にひどく汗をかいているという場面に出てくる文である。したがってこの in は時間を表す前置詞というよりは、状態ないし状況を表すものと解釈すべきであると考えられる。(i a) については本稿執筆時では文脈は不明である。

- (23) a. 同類集合での限定化 (= (22a))



- b. 異種集合での限定化 (= (22b))



(久野・高見 (2004: 18))

同類集合での限定化の the を含む the summer は、「summer₁ でも summer₃ でも summer₄ でもなく、この summer」という形である特定の summer (ここでは summer₂) を取り出すものである。それに対して、異種集合での限定化の the を含む the summer は、「spring でも fall でも winter でもなく、summer」という形で summer を取り出すものである。

本稿と直接関係する次の例についても同じ議論が成り立つ。

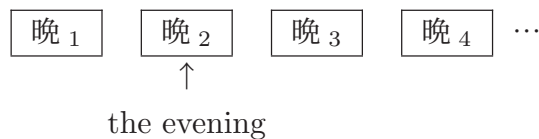
- (24) a. He died on
- the evening of October 13, 1990.

(同類集合での限定化)

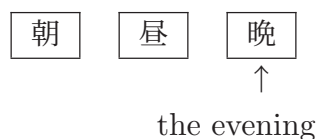
- b. I don't work in
- the evening*
- ; I just relax. (異種集合での限定化)

(久野・高見 (2004: 19); 強調原文)

- (25) a. 同類集合での限定化 (= (24a))



- b. 異種集合での限定化 (= (24b))



(久野・高見 (2004: 19))

同類集合での限定化の the を含む the evening は、「evening₁ でも evening₃ でも evening₄ でもなく、この evening」という形である特定の evening（ここでは evening₂）を取り出すものであるのに対して、異種集合での限定化の the を含む the evening は、「morning でも afternoon でもなく、evening」という形で evening を取り出すものである。

morning などに付く the に関して、同類集合での限定化の the が本稿で言う捉え方 2（一日の内部構成には関心を向けず、複数の日を念頭に置く捉え方）にふさわしく、異種集合での限定化の the は本稿で言う捉え方 1（一日の外には注目せず、一日の内部構成に関心を向ける捉え方）にふさわしいことは、あらためて言うまでもなく明らかであろう。

また、柏野 (2010: 233-234) は、Close (1975)²⁴などに言及しつつ、「次のような表現では初出でも名詞に the を付けて用いる」として (26) を挙げ、(27) のように述べている。

- (26) a. I can play *the* piano.
 b. I like *the* summer best.
 c. He was gone when she woke in *the* morning.
 彼女が朝、目を覚ますと彼はすでにいなかった。
 (強調、訳ともに原文。)

- (27) この the は、全体を構成するいくつかの異なった要素からの特定化を表すもので、他との「対立を表す the」と呼ばれる。

[ここにあった例文 [26] は上に示した—本多注]

例えば、上の [26b] の summer は、数ある夏の中で特定の夏（例えば、

²⁴ Close (1975: 6.20 (p.135)) は次のように述べている。

- (i) *The* is also used as a signal that the speaker is distinguishing one part of his environment from another. He speaks of living in *the town* as distinct from *the country*; of *the land* as distinct from *the sea*, of *the left* as distinct from *the right*. The seasons can be mentioned with the zero article, eg *If Winter comes, can Spring be far behind?* But *the* can be used in distinguishing one season from another, eg
 65 Birds fly north in (the) summer and south in (the) winter.

in the summer of 2010) のことを指しているのではなく、1 年を構成する「春夏秋冬」の中で、(春でも秋でも冬でもない) 夏という特定の季節を指している。

次の (28) については、「全体の中の要素同士が対照されていて、the が対立を示していることをよく表している例である」(柏野 (2010: 234)) としている。

- (28) The station is notorious for being drafty and cold in *the* winter and completely airless in *the* summer.

(その地下鉄の) 駅は、冬にはすきま風が入り寒く、夏には風通しが悪いので評判が悪い。
(強調、訳ともに原文。)

そして、「the がこのように対立を表すのは、「左右」「朝昼晩」「東西南北」「春夏秋冬」「現在・過去・未来」のようなセットになっている名詞群のうちの 1 つを取り出して述べるときに多い」(柏野 (2010: 234)) とまとめ、次の (29) を出している。

- (29) a. the north, the south, the east, the west
b. the left, the right
c. the past, the present, the future
d. the town, the country
e. the land, the sea
f. the summer, the winter, the spring, the fall [autumn]

柏野 (2010: 233-236) の言う「対立を表す the」は、久野・高見 (2004: 18-24) が「異種集合での限定化」の the と呼ぶ用法に相当するものである²⁵ ²⁶。

6 本稿の提案の位置づけ: 認知意味論との関係およびいくつかの先行研究との関係

本節では本稿の提案を、認知意味論およびいくつかの先行研究との関連で位置づける。

²⁵ 織田 (2002) はこの the を、「1 つの全体を構成する特定の部分要素」を指示するとしている。

²⁶ 久野・高見 (2004) の言う「同類集合での限定化」の the と「異種集合での限定化」の the は、それぞれ「個体レベルの排他性を持つ the」「カテゴリーレベルの排他性を持つ the」と位置づけることができる。これについての詳しい議論は別の機会に譲りたい。

本稿の提案は、一日、朝などについて2つの異なる捉え方の可能性が存在し、それが前置詞 in と on の使い分けの基盤にあるというものである。この議論は、第1節で提示した「捉え方 (construal)」に基づく意味観に基づくものである。

on を捉え方2と結びつける本稿の提案は、「特定の日であれば前置詞は on」という観察を、「捉え方」を重視する認知意味論の立場から定式化したものと位置づけることができる。

また、Wierzbicka (1993: 445-446) は「on は長さを持つ対象とは相性が悪い」という趣旨の観察をしているが、本稿の提案はこの観察とも軌を一にする。さらに Wierzbicka (1993: 445-448) とそれを受け継いだ山口 (2011: 141) は、「on は一連のユニット連鎖のなかの容易に特定可能なユニットを指定する」という趣旨の議論をしているが、本稿の提案はこの観察を明示的な形で捉えている。

ただし Wierzbicka (1993) と山口 (2011) が議論の対象としているのは on が「日」を表す表現を目的語として取る場合である。Wierzbicka (1993) は on が morning を目的語とする事例に言及はしているが、積極的な議論の対象とはしていない。

on の使用について、Fillmore (2002) は次のように述べている。

- (30) Otherwise, there are certain generalizations concerning the selection of marking prepositions. For example, *at* is chosen with time point expressions (*at noon*, *at midnight*, *at dawn*, but *at night*); *in* is chosen for general time periods, like *in December*, *in the morning*, *in the summer*, *in 1941*. But the preposition *on* preempts *in* just in the case of day units and day parts that are explicitly connected with particular days, but this pre-emption does not override the zero marking of the deictic names. Thus, we get *on Wednesday*, *on Wednesday morning*, *on the next day*, etc.

下線部: in をさしおいて on が前置詞として選ばれる場合がある。それは、特定の日を明示する言葉が現れて、それと「日」という単位または「日」の部分が結びつけられている場合である。…その例として… on Wednesday morning…がある。

(Fillmore (2002: 56); 下線本多、その他の強調原文。)

これは「特定の日であれば前置詞は on」という観察と基本的に同じ趣旨の議論である。

ただ、Fillmore はこの後、“There are numerous puzzles here.” と述べ、次のように続けている。

- (31) When no actual day name is included, but the expression presupposes a context in which the succession of days is relevant, we still get *on*. Thus, *on the next morning*, but oddly also *on that morning*, *on the morning of the funeral*.

下線部: 曜日を表す表現がないときでも、「日」の連鎖が問題になる文脈を前提とする表現であれば、やはり on が現れる。

(Fillmore (2002: 56); 下線本多、その他の強調原文。)

この下線部は上に紹介した Wierzbicka (1993: 445-448) および山口 (2011: 141) の議論と同趣旨である。したがって本稿の提案はこの観察も明示的な形で捉えているといえる。

そして Fillmore は少し下のところで、(32) を挙げながら (33) のように述べている。

- (32) a. On the night of the full moon
b. On the morning of our departure
c. On the morning of Dobson's funeral
d. On the night of the fatal attack (Fillmore (2002: 57))
- (33) ... there can be a semantic/pragmatic requirement that there is always an allusion to a particular day which justifies the choice of *on*.

可能性としては、ある特定の日が暗示的にせよ必ず言及されなければならない、そのような意味論的・語用論的な要件が満たされることによって、前置詞として on を選ぶことが可能になるということかもしれない。

(Fillmore (2002: 58); イタリアック原文。)

本稿の提案はこの Fillmore の直観的な観察も捉えている。

ただしここまでで紹介した諸研究には、「同一の対象に対して複数の異なる捉え方が可能である」という、本稿が依拠する認知意味論の基本的な考え方へ

の言及はない。

本稿で言う認知意味論の基本的な考え方と同様の立場を取っている解説としては、安藤 (1981) と織田 (2002) がある。

安藤 (1981)²⁷は、次の (34) のように述べている。

- (34) ということは、特定の午前・午後・夕方は義務的に on をとるわけではない、ということを物語っています。また、このような場合、on と in とは interchangeable であると考えるべきでもありません。むしろ、そこには、きびしい意味的な対立があると考えるべきです。つまり、たとえば *on the morning* の場合は、date を設定する表現として、morning が“時点” (point in time) として把握されているのであり、一方、in the morning の場合は、‘in the course of the morning’ という意味で、morning が“期間” (period of time) として把握されているわけです。 (安藤 (1981: 518); 下線本多、それ以外の強調は原文。)

この引用の下線部の基盤にある考え方は、本稿で言う認知意味論の基本的な考え方と一致するものである。ただし安藤が注目しているのは、「morning がどのような長さのものとして把握されているか」であって、これは本稿の着目点である、「一日の内部構成に関心を向ける、一日の外には関心を向けない」か「複数の日を念頭に置く、一日の内部構成には積極的な関心を向けない」か、とは異なる²⁸。また、本稿が2つの捉え方の競合の可能性を考慮しているのに対して、安藤は競合には言及していないという相違点も挙げることができる。

本稿の立場により近いのが織田 (2002: 100-101) である。織田は (35) を挙げ、(36) のように述べる。

- (35) a. The accident happened *in* the morning.
b. The accident happened *on* the morning of the wedding.
(強調原文。)
- (36) しかし、「朝昼晩」では、冠詞は同じ定冠詞を用いても、先の [35] のように、sub-categories の場合は in、class members の場合は on、と使い分けている。

²⁷ この文献の存在を教示してくださった萩澤大輝氏に感謝します。

²⁸ そのために、例文についての安藤の扱いが筆者にとっては隔靴搔痒の感があるものになっているのが残念である。

結果としてはどちらも、その事件が起こった特定の朝を指すことになるのだが、その指示同定の過程は違うということである。‘in the morning’の場合は、いつの朝かということには関心がなく、「朝昼晩」のうちのいつか、ということに表現の重点がある。「昼でもなく晩でもない、朝に…」ということである。他方、‘on the morning of …’のほうは、起こったのが、「いつの朝か」ということに興味がある。数ある朝の中でも、「よりによって結婚式当日の朝に…」と言っている。いくつもの朝の中から特定の朝に指示言及する。

このように、同じ定冠詞形の ‘the morning’ でも、その指示同定の方略に違いがある。‘on the morning of …’のほうが、数ある朝の中から「その朝に」と、より指示詞に近い形で、特定メンバーの朝 (a particular morning) を指示しているのに対して、‘in the morning’のほうは、ある1つの部分集合 {朝、昼、晩} の中から特に「朝」という部分構成要素を取り出し、「この朝の部分において」と言っているのである。

したがって同じ morning とは言っても、厳密に言えばその捉え方は異なっている。一方は区切られた部分の時であり、他は経過する本来の時である。この違いが、「春夏秋冬」の場合とは異なって、前者では ‘in the …’ に、後者では ‘on the …’ に、前置詞の使い分けとなって顕在化することになったということである。

織田が提示している冠詞の説明、同じ morning に2つの異なる捉え方があるという主張、そしてその捉え方の違いと前置詞の選択の相関についての主張は、いずれも本稿の立場と一致する。

また、本稿の提案する捉え方1に近い議論が織田 (2002: 96-97) にある。

- (37) さて日本語でも、1日を「日夜」「昼夜」に二分し、さらにその「日」「昼」を「朝昼晩」に三分して考えるのが一般的である。英語でも1日24時間を ‘day and night’ に分け、さらにその起床から就寝までの時間を、‘morning / afternoon / evening’ の3つの部分要素から成る1つのシリーズ、あるいは1つの集合と考えるのが社会的慣行である。そしてその慣行は、‘in the …’ 形の使用という言語使用上の慣用によっても支えられている。

[ここにあった例文 [38] は下に移した—本多注]

これら [= [38]—本多注] の用例における定冠詞使用の言語直感の基礎には、まず、

[ここにあった解説 [39] は下に移した—本多注]

という思考パターンが慣習的に成立していて、それがこれらの発話に先行する、言わば文脈テキストの役割をはたしている。これら 3 つの部分構成要素のうちのどの時間帯になのか、その特定化の表現が定冠詞の使用となって表れている。

- (38) a. A paper in *the morning* is not a luxury.
 b. And then they went to the theater in *the evening*. (強調原文。)
- (39) [Man's waking time usually consists of three parts or periods, and they are *morning, afternoon and evening*.]²⁹ (強調原文。)

ここで述べられていることは、本稿の提案する捉え方 1 に非常に近い。本稿の提案は、この議論をより整理した形で提示しなおしたものと位置づけることができる。

本稿の提案と織田の議論の相違点としては、一つには、本稿が 2 つの捉え方の競合の可能性を考慮しているのに対して、織田は競合には言及していないということがある。そしてもう一点として、本稿では on の場合の捉え方を「経過する本来の時」と見ているわけではないということがある。

7 その他の先行研究の例

本稿の提案は morning、afternoon、evening 以外にも適用可能である。ここでは辞書以外の先行研究で扱われた例の一部を検討する。

Wierzbicka (1993) は次のような興味深い観察をしている。

- (40) a. **In the night**, I heard a strange noise.

²⁹ なおこれは、織田 (2002: 102) で次のように改訂されている。

(i) [Our waking time usually consists of *a morning, an afternoon and an evening*.] (強調原文。)

b. * **On** the **night**, I heard a strange noise.

c. **On** the first **night**, I heard a strange noise.

(Wierzbicka (1993: 448))

(40a) の **in** the night は (4) の **in** the morning と同様の捉え方によるといえる。つまり一日の内部構成に関心を向ける捉え方（捉え方 1）である。この場合、(40b) に示されるように on は不自然になる。一方 the first night は、複数の日を念頭に置いた上でその中のひとつの night を取り出した表現である。したがって捉え方 2 が働いていることになり、on が自然になる。(40c) の **on** the first night が自然になるのは、このためであるといえる³⁰。

次に Lindstromberg (2010: 78) の例を検討する。

(41) a. **On** the first **day**, we ...

On the **day** we arrived, we ...

b. Hedgehogs are likely to be seen out **in** the **day**.

(41a) では複数の日を念頭に置いた捉え方（捉え方 2）がされている。そのため on が自然になる。(41b) の day は Lindstromberg も述べるように daytime とパラフレーズできる意味で用いられている。この day は本稿の図 1 では day₁ に当たり³¹、暗黙のうちに night₁ と対比されている。したがって、この例は一日の内部構成に関心を向ける捉え方（捉え方 1）によると言える。そこで前置詞は in が自然になる。

辞書に記載されている次の例も同様である。

(42) earlier / later **in** the **day**

この day は day₃ に当たるが、副詞の early / late が付いているということは、一日の内部構成に立ち入った見方をしているということである。したがってここでの捉え方は捉え方 1 ということになる。このことから、本稿の予測としては前置詞は in が選ばれることになる。この予測は言語事実と一致している³²。

³⁰ (40) の night は night₂ と考えられる。ただ、これが night₁ と night₂ のいずれに該当するにしても、本稿の議論への影響はない。

³¹ OALD s.v. **daytime** (<https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/daytime>)、**day** (<https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/day>) を参照。

³² なお、earlier / later **in / on** the **day** of NP に関しては、本稿の提案は in と on の揺れ

8 スコープとプロファイル: 認知文法への理論的な位置づけ

本稿の図 1 と図 2 は認知文法³³というスコープ³⁴を記述したものと位置づけることができる。スコープとは概略、ある事物を概念化する際にあわせて認識される範囲ということになる。

人間はある事物を視知覚するときに、その事物だけを単独で知覚するわけではない。しばしば別の何かとの関連で、そして常に必ずそ（れら）の事物が存在する場ないし領域との関連で、その事物を知覚する。このとき知覚者の注意はその事物に向けられ、当該の事物は知覚者の注意の焦点になる。それ以外のもの（隣接して存在する事物や、それ（ら）を含む場ないし領域）は、あわせて知覚されるものの、積極的な注意は向けられないものとなる。ただ、積極的な注意は向けられないものの、必ず知覚はされている³⁵。

たとえばある人がパソコンで文書を作っていて、その人の注意の焦点は画面上に映った「クレヨン」という文字列にあったとする。このときその人の視野に入っているのは、この文字列だけではない。その周囲にある他の文字列とソフトウェアの画面の他に、たとえばパソコンの隣に置いてあるコーヒーカップ、部屋の窓、その向こうの景色なども視野に入っている。そしてそれらはすべて、空間という領域にあるものとして知覚される。「クレヨン」という、注意の焦点になっている文字列だけが視野全体を占めることはありえない³⁶。

しかし視知覚において、知覚者にとってその位置から見るのが可能なものがすべて同時に視野に入るわけではない。「クレヨン」という文字列に注意を向けている人物の視野に正面の窓は入っていても、その右にあるテレビは視野に入らないかもしれない。このような、一度に視野に入る範囲が視知覚におけ

を予測する。この表現は筆者が参照した辞書には記載されていないが、Google 検索の結果を見る限りでは、この場合は on が優勢のようである。

³³ Cognitive Grammar (Langacker (1987, 1991, 2008, 2013))。

³⁴ もともとは scope of predication (Langacker (1987: 118-120))、最近では単に scope (Langacker (2008: 62-65))。

³⁵ これは知覚心理学でいう「図と地の分化 (figure-ground separation)」に当たる。注意の対象となっている当該の事物が知覚者にとっての「図」になり、それ以外のものは知覚者にとっての「地」となる。そして、「地」の知覚のない「図」のみの知覚は成立しない。

³⁶ 表示される文字のサイズを極大にして画面に目を近づけて見れば、「クレヨン」という文字列だけで視野全体を占めることはありえる。ただしその場合、注意の焦点が変化している。「クレヨン」という文字列全体ではなく、その中の一部のみに注意が向けられている。したがってこの場合でも、注意の焦点が単独で視野を占めるわけではないということに変わりはない。

るスコープになる。

そして認知文法では、同様の構造が（視）知覚だけではなくて概念化にも成立すると考える³⁷。たとえば yesterday という語は、ある一日を注意および指示の対象とする語であるが、この語を使う人は、その一日だけを認識の対象としているわけではない。当該の日の翌日である、発話の現在時を含む日（「今日」）は必ず同時に認識されているし、当該の日の前日（「一昨日」）も認識の範囲に入っている可能性が高い。だが、ひと月前の水曜日などが認識の範囲に入ってる可能性はきわめて低い。このように、当該の事物の概念化とあわせて認識される範囲が、認知文法で言うスコープである³⁸。

そして認知文法では、その当該の事物、すなわちスコープの中で注意の焦点となって指示の対象となるものを、プロフィール (profile) と呼ぶ³⁹。yesterday の場合には当該の日（発話の現在時を含む日の前日）がプロフィールということになる。

以上の解説を踏まえ、**スコープ**と**プロフィール**を明示しながら図1と図2を書きなおすと、図3と図4になる⁴⁰。

(43) a. the morning (図3; 前置詞は in)

b. the morning of the wedding (図4; 前置詞は on)

すでに述べたように、図3は一日についての複数のモデルをひとつの図にまとめたものであるため、実態以上に複雑になっている。人が morning という表現を用いる際に、毎回この**スコープ**の全体が同じように活性化するわけではないと考えられる。

また、ひきつづき視知覚とのアナロジーを用いて言うならば、on を使う場合の捉え方（捉え方2）は、in を使う場合の捉え方（捉え方1）に比べて、対象を遠くから、距離をおいて見ている、ということになる。距離をおいて見ることで、より広い範囲が視野に入るわけである⁴¹。

³⁷ Langacker (1987: 第3章3節), Langacker (2019: 140-141)などを参照。

³⁸ 本論で中心的に言及している construal に関して、scope が重要な要素であることは Langacker (1993b, 2019) などで述べられている。

³⁹ ただし認知文法が指示対象意味論を棄却して認知主義の立場を採っていることもあって、プロフィールは「現実世界における指示対象」ではなく「概念構造における指示対象」とされている。

⁴⁰ ここでの図の書き方は Langacker 自身の表記法とは異なるが、Langacker の議論の趣旨は捉えているはずである。

⁴¹ この議論は次の Lindstromberg (2010: 78) の議論と軌を一にする。

原則活動しない	活動にふさわしい			原則活動しない
(night ₂ /morning)	day ₂			night ₂
	morning	afternoon	evening	
(night ₁)	day ₁		night ₁	
暗い	明るい		暗い	
morning ₀		(afternoon)		
		day ₃		
		24 時間		

図 3 捉え方 1 における スコープ と プロファイル

day ₃				day ₃				day ₃				day ₃			
m	a	e	n	m	a	e	n	m	a	e	n	m	a	e	n

図 4 捉え方 2 における スコープ と プロファイル

以上により、本稿の提案が認知文法の理論的な枠組みの中に位置づけられたことになる。

9 反例に見える例とそれに対する説明

ここでは、本稿の提案に対する反例に見える例を扱う。

Fillmore (2002) は、次のような興味深い事実観察を提示している。

- (44) a. He was here **in** / ***on** the **morning**.
b. He was here ***in** / **on** that **morning**.
c. He was here ***in** / **on** Christmas **morning**.
d. He was here ?**in** / **on** the **morning** of Christmas day.

-
- (i) a. ... when we use *ON*, it is as if in our mind's eye we view a day or a morning (etc.) from far enough away that we do not discern it as a sweep of time but rather as a compact, smallish block ...
b. We use both *IN* and *ON* in the frame, the morning/afternoon/evening ... *IN* is normal provided that the frame is not followed by a specifying phrase such as *of the 9th* or *that she arrived*. In these latter cases, *ON* tends to be used, probably since such specifying phrases as these reflect a more distant mental viewpoint.

- e. He was here **in** / ***on** the **morning** on Christmas day.
(Fillmore (2002: 33))

これらの例のうち、(44a-d) までは本稿の提案で問題なく説明可能である。(44a) の the morning は (4) と同じである。(44b) の that morning と (44c) の Christmas morning は、「他の日の朝ではなく「あの日の」朝、「クリスマスの日の」朝という形である特定の morning を取り出しているものである。すなわち複数の日を念頭に置いた捉え方である捉え方 2 で捉えられていることになるので、前置詞として on が選択されるのは本稿の予測通りである。(44d) の the morning of Christmas day については、(7) で **on** the morning of the wedding との関連で述べたとおりである⁴²。

本稿の提案にとって問題になるのは次の対比 (= (44d, e))⁴³である。

- (45) a. He was here ?**in** / **on** the **morning** of Christmas day.
b. He was here **in** / ***on** the **morning** on Christmas day.
(Fillmore (2002: 33))

この例のどちらにも Christmas day が現れているということは、どちらの例においても（何からの形で）複数の日を念頭に置いた捉え方がなされているということである。したがって本稿の議論のここまでの道具立てでは、どちらの例でも前置詞は on が選択されることを予測する。(45a) がおおむね予測通りであることはすでに述べたとおりであるが、(45b) では、実際に選択される前置詞は in であり、ここまでの道具立てから得られる予測には反する。これをどう扱うかが問題になる。

これについては、次のような文で起こっていることがここでも起こっていると見るのが妥当であると考えられる。

- (46) Your camera is on the shelf, in the closet, in the bedroom, upstairs.
(Langacker (2008: 81))

ここに見られるのは、直観的な言葉で言えば「ズームアウト (zooming-out)」である。話者は当該の対象の位置をまずクローゼット内の接近した視座から *on the shelf* と捉え、次にクローゼットの外に出た視座から *in the closet* とい

⁴² ただし本節末の議論も参照のこと。

⁴³ この例を指摘してくださった萩澤大輝氏に感謝します。

う一段階大きな枠で捉え、次に部屋から出た視座で *in the bedroom* とさらに一段階大きな枠で捉え、最後に下の階に降りた視座から *upstairs* という大きな枠で捉え、という形で順次視座を移動して対象を見る枠を大きくしている。

そして Langacker は、視座の順次的な移動と、それに伴って生じる、対象を捉える枠の順次的な遷移が、ズームアウトの方向だけではなくてズームイン (zooming-in) の方向でも起こりうることを示している。

- (47) Your camera is upstairs, in the bedroom, in the closet, on the shelf.
(Langacker (2008: 81))

(46) と (47) は同一の状況を異なる捉え方で捉えて表現したものである。ズームアウトでは視座を対象から順次遠ざけて、対象を捉える枠を順次大きくしていくという捉え方がされているのに対して、ズームインでは視座を対象に順次近づけて、対象を捉える枠を順次小さい方に絞り込んでいくという捉え方がされている。

そして Langacker (1993b: 448-449) は、ズームインすなわち対象を捉える枠の絞り込みを、スコープの順次的な遷移の例であるとしている⁴⁴ ⁴⁵。事物を捉えるときのスコープが、大きなスコープから小さなスコープに順次切り替わられているということである。そして言うまでもなく、ズームインについてのこの説明はズームアウトにも適用される。つまり (46) と (47) に見られる現象は、前節で導入した道具立てで説明することができるわけである。

そしてこのズームアウトは、空間領域だけではなく、時間領域でも起こりうる。そのことを示すのが次の例である。

- (48) I left at 5 a.m. in the morning on Tuesday last week.
(Declerck, Reed, and Cappelle (2006: 137))

これについて Declerck et al. は次のように注記している。

- (49) The situation time is contained in the Adv-time specified by *at 5 a.m.*, which is included in the Adv-time specified by *in the morning*,

⁴⁴ ただしこの「スコープの(順次的な)遷移」という用語は Langacker 自身のものではなく、Langacker の議論の趣旨を酌んで筆者が暫定的に採用したものである。

⁴⁵ Langacker (1993a) はこれを「参照点能力 (reference-point ability)」という認知能力と関連づけている。そしてこの参照点能力は、Langacker (1997) では「焦点連鎖 (focus chain)」という認知能力によって説明されている。

which is itself included in the Adv-time specified by *on Tuesday*, which in its turn is included in the Adv-time specified by *last week*.

状況生起時は at 5 a.m. が特定する副詞句時に含まれるが、この副詞句時は in the morning が特定する副詞句時に含まれ、これはそれ自身が on Tuesday の特定する副詞句時に含まれ、これが今度は last week が特定する副詞句時に含まれる。

(Declerck et al. (2006: 137-138); 原文は全体がイタリックで書かれているのを正体に改め、原文の下線をイタリックとした。)

Declerck et al. は Langacker には言及していないが、ここで述べられていることは Langacker の言う「ズームアウト」と同趣旨である。

以上の議論を踏まえて、(45b) (下に再掲) の議論に戻る。

- (45) a. He was here ?**in** / **on** the **morning** of Christmas day.
b. He was here **in** / ***on** the **morning** on Christmas day.

(45b) は (48) と同じ構造になっており、これも時間の領域でスコープの遷移 (ズームアウト) が生じている例と考えることができる。最初の段階では図 3 のスコープ (一日の内部構成に関心を向ける捉え方 1) によって朝ないし午前中を捉えて **in** the morning と表現し、次の段階でスコープを切り替えて図 4 (複数の日を念頭に置いた捉え方 2) の捉え方でこの朝ないし午前中をクリスマスの日と関連づけていると考えられるわけである。

ちなみにここで、もう一点問題が生じるように思われるかもしれない。(45b) **in** the morning **on** Christmas day がスコープの遷移 (ズームアウト) で説明できるとしても、同じことは (45a) **on** the morning **of** Christmas day でも起こってしまうのではないかということである。つまりここでの議論は (45a) でも **in** が自然であることを予測してしまうのではないか、ということである。これについては、両者の統語構造の違いを考える必要がある。

- (50) a. ?**in** / **on** [the morning **of** Christmas day]
b. [**in** the morning] [**on** Christmas day]

(50a) では the morning of Christmas day が単一の名詞句を構成し、これが全体として前置詞に結びつく。そして (50a) は全体として一つの前置詞句を

なす。それに対して (50b) では the morning on Christmas day は構成素をなさない。そして (50b) は全体としては in the morning と on Christmas day という 2 つの前置詞句が並置されたものとなる⁴⁶。

ここで、スコープの遷移が生じている場合には言語表現としては複数の前置詞句（あるいは副詞句）の並置として現れると想定すれば、(50) における前置詞の違いを説明することができる。そしてこの想定は自然なものと思われる。

具体的には、(50a) ?in / **on** [the morning **of** Christmas day] においては、話者は最初からある朝をクリスマスの日との関連で捉えて（すなわち、他の日ではなくクリスマスの日、という形で複数の日を念頭に置きながらその朝を捉えて）、the morning of Christmas day と表現している。この捉え方は捉え方 2 であり、選ばれる前置詞は on となる。そしてこの捉え方は最初から複数の日を念頭に置いたものであり、その意味で話者は最初からスコープの広い捉え方をしていると言える。

一方 (50b) [**in** the morning] [**on** Christmas day] では、話者は最初の段階では、ある朝を複数の日を念頭に置かずに捉えて the morning と表現している。この捉え方は捉え方 1 であり、選ばれる前置詞は in となる。そして次の段階で、話者はこの朝をクリスマスの日との関連で捉えなおす（すなわち、他の日ではなくクリスマスの日、という形で複数の日を念頭に置きながらその朝を捉えなおす）。この段階での捉え方は捉え方 2 であり、前置詞は on が選ばれることになる。ここで言う「捉えなおし」が、前述の「スコープの遷移」に当たる。

ちなみにスコープの遷移の例として上に挙げたものも、複数の前置詞句・副詞句が並置されたものである。

ただし Fillmore (2002: 33) は、(50a) における in を、「*」ではなく「?」としている。また第 2 節と第 4 節で触れたように、『ウィズダム英和辞典』は on の「語法」欄でこの種の例に関して、「まれ」と注記しつつも in を併記している。このことは、(50a) のような例でもスコープの遷移があると解釈することが完全に不可能というわけではないということを示している可能性がある。

10 残された最大の問題: 空間表現との繋がり

本稿の提案に関して残される問題はいろいろあるが、ここでは最大のものについて述べておく。morning などに関して、一日の内部構成に関心を向ける捉

⁴⁶ これについては厳密には統語的なテストによって示す必要があるが、本稿では割愛する。

え方（捉え方 1）をしている場合には前置詞として in が選ばれ、複数の日を念頭に置いた捉え方（捉え方 2）をしている場合には on が選ばれる、という本稿の提案が妥当であるとして、それではなぜそのようになるのか、という問題である。言い替えれば、どうして「捉え方 1 → on、捉え方 2 → in」とならず、「捉え方 1 → in、捉え方 2 → on」となっているのか、ということである。

これについては、in と on の時間用法が空間用法とどのように繋がっているかを明らかにすることが必要になる。認知意味論では、時間用法と空間用法の両方を持つ前置詞に関しては、時間用法は空間用法からのメタファーによって生じた (Lakoff and Johnson (1980, 1999)) と考えるのが標準的な立場であり、このような意味拡張の仕組みについての説明が、上記の「なぜ」に答えるものとなるからである。

意味拡張の仕組みの解明は認知意味論の主要な課題のひとつである。したがって、認知意味論の立場においては、上記の問題はきわめて重要なものである。しかしながらこれについて、残念ではあるが本稿では保留としたい⁴⁷。

11 まとめ

本稿では前置詞 in と on の時間用法について、認知意味論の立場から議論してきた。

まず第 1 節で、認知意味論の最も基本的な意味観を提示した。すなわち、言語表現の意味は指示対象のみによって決まるのではなく、そのものについての話者・概念化者の捉え方も関わるのだというものである。特に人間には同じ一つのものについて 2 つ以上の異なる捉え方をする能力があり、それによって、同一の状況であっても異なる意味の言語表現によって指示されることがあるということを述べた。

そして第 2 節では主として辞書記述に基づいて、in と on の時間用法についての言語事実を提示した。

第 3 節で一日、朝などについて、人間は 2 つの異なる捉え方をすることができるという可能性を示した。

そして第 4 節で、in と on の使い分けについて前節の議論を踏まえた仮説を提示し、それを検証していった。その結果、本稿の仮説はおおむね妥当であることが明らかになった。

⁴⁷ 試みとしては Wierzbicka (1993), Lindstromberg (2010), 山口 (2011) などがあるが、これらについての検討も保留としたい。

第5節では in と on との関連で、時間表現に現れる冠詞について久野・高見 (2004) および柏野 (2010) に依拠して解説した。

第6節では認知意味論およびいくつかの先行研究との関連で、本稿の提案の位置づけを行った。

第7節では本稿で提示した説明が、他の研究で提示されたデータについても適用できることを示した。

第8節は本稿の提案を認知文法の理論的な道具立てであるスコープとプロファイルを用いて提示しなおし、本稿の立場を認知文法の枠組みの中に位置づけた。

第9節ではスコープの遷移という道具立てを導入することで、一見本稿の提案に対する反例に見える例が説明できることを示した。

第10節では in と on の時間用法の成立の仕組みが重要な問題として残されることを述べた。

本稿が英語の前置詞の意味の研究にいささかなりとも寄与することを望む。

参考文献

- Close, R. A. (1975). *A Reference Grammar for Students of English*, Longman.
- Coventry, K. R. (2019). Space, In E. Dąbrowska and D. Divjak (eds.) , *Cognitive Linguistics: Key Topics*, 44–65 De Gruyter Mouton.
- Coventry, K. R. and Garrod, S. C. (2004). *Saying, Seeing, and Acting: The Psychological Semantics of Spatial Prepositions*, Psychology Press.
- Declerck, R., Reed, S., and Cappelle, B. (2006). *The Grammar of the English Tense System: A Comprehensive Analysis* (The Grammar of the English Verb Phrase: Volume 1), Mouton de Gruyter.
- Fillmore, C. J. (2002). Mini-Grammars of Some Time-When Expressions in English, In J. Bybee and M. Noonan (eds.) , *Complex Sentences in Grammar and Discourse: Essays in Honor of Sandra A. Thompson*, 31–59 John Benjamins Publishing Company.
- Gibson, J. J. (1979). *The Ecological Approach to Visual Perception*, Houghton Mifflin.
- Lakoff, G. and Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*, The University

of Chicago Press.

- Lakoff, G. and Johnson, M. (1999). *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*, Basic Books.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar*, Volume I: *Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar*, Volume II: *Descriptive Application*, Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1993a). Reference-Point Constructions, *Cognitive Linguistics*, 4 (1), 1–38.
- Langacker, R. W. (1993b). Universals of Construal, *BLS* 19, 447–463.
<http://journals.linguisticsociety.org/proceedings/index.php/BLS/article/view/1532> .
- Langacker, R. W. (1997). A Dynamic Account of Grammatical Function, In J. Bybee, J. Haiman, and S. A. Thompson (eds.) , *Essays on Language Function and Language Type, Dedicated to T. Givón*, 249–273 John Benjamins.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- Langacker, R. W. (2009). Reflections on the Functional Characterization of Spatial Prepositions, *Belgrade English Language & Literature Studies* 1, 9–34. Also in *CORELA, Numéros spéciaux, Espace, Préposition, Cognition — Hommage à Claude Vandeloise*, 2010.
- Langacker, R. W. (2013). *Essentials of Cognitive Grammar*, Oxford University Press.
- Langacker, R. W. (2019). Construal, In E. Dąbrowska and D. Divjak (eds.) *Cognitive Linguistics: Foundations of Language*, 140–166 De Gruyter Mouton.
- Lindstromberg, S. (2010). *English Prepositions Explained* (Revised Edition), John Benjamins Publishing Company.
- Wierzbicka, A. (1993). Why do we Say *in April, on Thursday, at 10 o'clock?*: In Search of an Explanation, *Studies in Language* 17 (2), 437–454.
- 安藤 貞雄 (1981). 「*on Sunday morning / in the summer of 1972*」 渡辺

- (1981: 518).
- 安藤 貞雄 (2005). 『現代英文法講義』 開拓社. (2008 年第 6 刷).
- 井上 拓也 (2018). 「アフォーダンス知覚を促すデザインとしての言語—生態学的言語論の理論的考察—」『生態心理学研究』 **11** (2), 59–62.
- 織田 稔 (2002). 『英語冠詞の世界: 英語の「もの」の見方と示し方』 研究社.
- 柏野 健次 (2010). 『英語語法レファレンス』 三省堂
- 柏野 健次 (2011). 『英語語法ライブラリ: ペーパーバックが教えてくれた』 開拓社.
- 久野 暲・高見 健一 (2004). 『謎解きの英文法 冠詞と名詞』 くろしお出版.
- 河野 哲也 (2003). 『エコロジカルな心の哲学』 勁草書房.
- 小西 友七 (1976). 『英語の前置詞』 大修館書店.
- 佐々木 正人 (2015). 『新版 アフォーダンス』 岩波書店.
- 西村 義樹・野矢 茂樹 (2013). 『言語学の教室: 哲学者と学ぶ認知言語学』 中央公論新社.
- 福村 虎治郎 (1981). 「come at three *of* the following afternoon [*in* the afternoon of the next day]」渡辺 (1981: 515-516).
- 本多 啓 (2016). 「Subjectification を三項関係から見直す」中村 芳久・上原 聡 (編)『ラネカーの (間) 主観性とその展開』 91–120 開拓社.
- 本多 啓 (2019). 「生態心理学と認知言語学」辻 幸夫 (編)『認知言語学大事典』 669–681 朝倉書店.
- 本多 啓 (2021). 「試論: 認知主義の認知意味論と非認知主義の認知意味論」『神戸外大論叢』 **74**. (本号)
- 山口 治彦 (2011). 「at/in/on の意味論: 意味拡張と語用論的分業」『神戸外大論叢』 **62** (2), 137–155.
- 渡辺 登士ほか (編) (1981). 『英語語法大事典・第 3 集』 大修館書店.

辞書類

- Oxford Advanced Learner's Dictionary of English (OALD)* (on line),
<http://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/>.
『ウィズダム英和辞典』(2019 年第 4 版) 三省堂. (物書堂製 iPad 用辞書アプリ版).

『オーレックス英和辞典』(2013 年第 2 版) 旺文社. (物書堂製 iPad 用辞書アプリ版) .

『ジーニアス英和辞典』(2014 年第 5 版) 大修館書店. (物書堂製 iPad 用辞書アプリ版) .

コーパス

The Corpus of Contemporary American English. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.

News on the Web (NOW). Available online at <https://www.english-corpora.org/now/>

The TV Corpus. Available online at <https://www.english-corpora.org/tv/>

The Movie Corpus. Available online at <https://www.english-corpora.org/movies/>

The Corpus of American Soap Operas. Available online at <https://www.english-corpora.org/soap/>

The TIME Magazine Corpus. Available online at <https://www.english-corpora.org/time/>

British National Corpus (BNC). Available online at <https://www.english-corpora.org/bnc/>

Keywords: 認知意味論 捉え方 スコープ プロファイル